

I. 研究の概要

(1) 研究主題

**自らの考えを深める子どもを育てる
～国語科「読むこと」における説明的文章の指導を通して～**

(2) 研究主題設定の理由

変化の激しいグローバルな知識基盤社会の中で、「何を知っているか」だけではなく知識を活用して「何ができるか」への教育の転換が求められている。小学校学習指導要領に明記された国語科の目標においても、「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」と示されている。

『小学校学習指導要領(平成 29 年度告示) 解説 国語編』では、「国語科の改訂の趣旨及び要点」として「2 情報の扱い方に関する指導の改善・充実」で「急速に情報化が進展する社会において、様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり、情報同士の関係を分かりやすく整理したり、発信したい情報を様々な手段で表現したりすること」¹⁾が求められている。一方、中央教育審議会答申において、『教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであります、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていくことは喫緊の課題である。』²⁾と指摘されている。また、これらの課題を踏まえ「思考力、判断力、表現力等」の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けられた。学習指導要領の改訂において国語科では、「思考力、判断力、表現力等」の全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられている。自分の考えを広げたり、深めたりすることができるような指導が求められている。このことは、学校教育目標である「すすんで学ぶ子、自ら学び、自ら考え、粘り強く課題に取り組む子」を目指した指導とも重なる。

本校では、令和 5 年度から研究主題を「自ら考えを深める子どもを育てる」とし、研究教科を国語科に設定し、文学的文章の指導法の研究を進めてきた。研究を「読むこと」領域における文学的文章に統一することで、系統的に教材研究を進め、授業実践を行い、研究を深めることができた。

これまでの取り組みの成果としては、文学的文章で登場人物の心情を捉えることや文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えと友達の考えを比べて考えることができる子が増えたことである。また、大阪市学力経年調査の文学的文章の項目の正答率が高かった点も成果としてあげられる。学校独自に作成した児童質問紙の回答では、「国語の授業の内容は、分かりますか。」の項目において肯定的に答えた子どもの割合が 1 学期 92.7% から 3 学期 93.7%，「クラスの友達と話し合う活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることはできていますか。」の肯定的な割合は、1 学期 85.8% から 3 学期 90.2%，

「国語の授業で、自分の考えをもつことや自分の考えを広げることはできていますか。」の肯定的な割合は、1学期 85.8%から3学期 86.7%，と増えている。これらの結果から、児童は学習に対する基礎・基本の定着とそれによる理解力が高まり、「わかるようになった」という実感や「国語の授業が楽しい」という気持ちが高まったことが明らかとなつた。

しかし、大阪市学力経年調査からは、説明的文章の情報と情報の関係について理解し、文章の情報を整理する項目で、十分な成果をあげられていない。叙述をもとに根拠を示し、「なぜなら、その理由は」と自分の意見を友達に分かりやすい言葉や伝わる文を意識して自分の意見を表現するという点について、課題が残った。

このような課題を解決するために、書かれている内容や構成の特徴を正確に読み取り、読み取ったことに対する思いや考えを表現することを学ぶ必要がある。その際に「どんな意味か」「違いは何か」「理由は何か」を具体的に問いかけたり、児童が意識したりするよう指導する。さらに、思考そのものを支える語彙力を身に付けるために漢字の指導に力を入れていくという観点が大切である。こうした「言葉による見方・考え方」を鍛える授業は、必然的に「主体的・対話的で深い学び」へつながっていく。「主体的」とは、学びを子どもたちのものにすることである。そのためには、子どもたちが、学び方を身につけることが欠かせない。読み方や書き方を身につけ、それを用いることができるようになってこそ、主体的な学びとなっていく。「対話的」であるためには、「対話」を引き出す学習課題が必須のものとなる。そのためには、教師の教科内容への深い理解が欠かせない。子どもの「深い学び」には、教師の教材研究の深さがあつてこそものである。

本年度は、説明的文章を中心とした教材で研究を進めていきながら、「子どもが主体性を発揮できる授業づくり」、「協働的に学ぶ授業づくり」、「深い学びへと繋がる授業づくり」の視点で、研究を深めていく。

引用文献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」平成30年(2018年)
- 2) 文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」、平成28年(2016年)

(3) 研究内容

【視点1 子どもが主体性を発揮できる授業づくり】

方法① 子どもが追究したくなる学習課題の設定

- ・児童の実態を把握し、教材分析を行う。
- ・子どもの初読の感想から疑問や分かりにくいところなどの課題を見つけ、自ら説明文的文章を読み進めたくなるように学習課題を設定する。

方法② 振り返りの充実

- ・振り返りの観点「なしども」や文型などを示し、自らの学びを振り返る継続的指導をする。

な…何ができたか
し…知ったこと
とも…友達の意見を聞いて
も…もっと考えたいこと

【視点2 協働的に学ぶ授業づくり】

方法③ 問題解決に迫る交流の工夫

- ・多様な意見が出るもの、選択肢から選び出し根拠や理由を考えることができるものなどを検討する。
- ・ホワイトボードや思考ツール、付箋紙、学習者用端末、絵、写真等を活用。
- ・指名の仕方、ハンドサインなどを取り入れる。

【視点3 深い学びに繋がる授業づくり】

方法④ 子どもが自分の考えをもつようとする指導の工夫

- ・全体や個人での1人学びの時間を確保する。
- ・要約文や一文書きなどの話型の提示、ワークシートやノートの工夫をする。

方法⑤ 学んだことが今後の学習や日常生活へと繋がる言語活動の工夫

- ・深い学びへと繋がるように、学習指導要領C読むこと言語活動例をもとに工夫する。

○本校の研究を支える国語科の基礎・基本

学年や発達段階に合わせて行う。

- ・正確に語句を読み取る音読指導
- ・指導のねらいに合わせた並行読書
- ・語彙を増やすための辞書引き
- ・語彙力を伸ばす短文作り
- ・正しく書く指導のための観察